

漂民御覽記

全



特別

ル2

3392





102

3392





吹上御物見之図

御小物

御簾

御上之儀

儀大  
幸去又

砂利留

吹上  
御物

吹上御物見之図

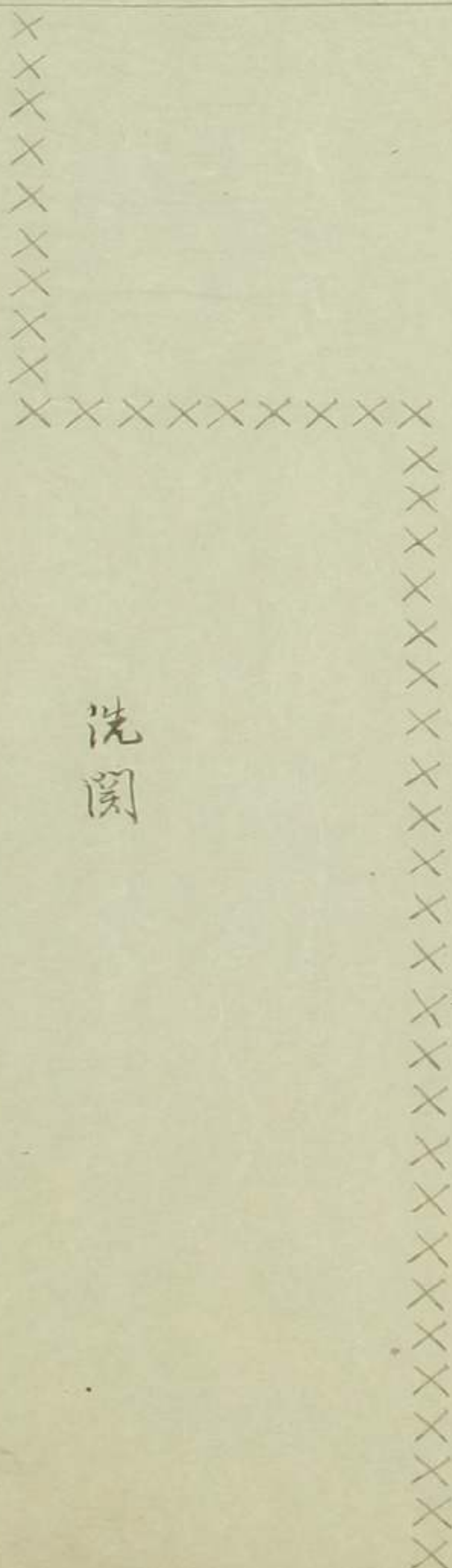
吹上

吹上御物見之図  
御簾  
御上之儀

吹上御物見之図  
御簾  
御上之儀

吹上御物見之図  
御簾  
御上之儀

洗関







源氏御覽之記

寛政五年癸丑九月十八日吹之の所物見

於之去ぬ天明二年壬寅十二月十日勢別

白子と出船一そを駿河の沖さきへほろへ

大風吹放なまる九月卯七月廿日

魯西亞フロシマの属海そくかい アミシツカといひ此へ源

流一まより カムサツカ オホツカ イルカラ

勢州若木村  
磯士口  
三十歳



大黒屋先大夫  
四十三



以カヤシヨク地と經歷— 歐羅巴洲エウロパから

魯西亞ラシヤ國の如くお女帝に思えさす

—と之去年九月三日俄夷の子モ口

とらぬ世もく彼等の船もく送りゆ

とれぬる神昌丸の船路と星を幸を更

同水も磯をかり老成 上陸河を御

抱見の正面、所を庵と外 所透見の

地、 所産を設く右の方れ御入例は

松平城守加納を江守平昌と流守高井

之様正別産を前、流村—と様(御小

納戸段と龜井駿河守小建河内守多紀

永壽院桂川南岡別産是等六事申候

尋訪と危き方を命と流村、御目録

中川節之御去部産を以て其為人の











一、この方より二、三初等船をこる所、何と申比  
の事

善

一、アミシツカと申、将へ渡るは、此の如く、  
舟を舟内食事ハ、兵の遊シホムシ遊馬ユリ百合の根、  
水々々、茶研と、白酒のこく、に、  
張る居よ、如、思、二、本、鼻の穴、二、本

角育く、而、婦、并よ、の、甲、に、ま、ま、い、ゆ、と、入  
ま、ま、は、ん、そ、角、ハ、自然、よ、け、ん、物、こ、い、び、く  
録の、牙、ま、ま、の、軸、の、を、こ、い、割、こ、ま、ま  
二、三、寸、無、さ、つ、一、お、め、ま、ま、の、ま、ま  
う、た、く、常、は、ま、ま、一、居、よ、い、男、子、ハ、被、髪、ま、ま  
男、女、ま、ま、の、毛、を、着、定、居、ま、ま、た、ま、ま、ま  
よ、う、い、カ、ム、サ、ツ、カ、と、申、地、一、舟、内、を、ま、ま、の、中



高祖の肉死人死に仕るる病斯日わ

ハ見及ふドチニカとチ病よる病和葉シケウル

青腿牙痲なり ボイクとる即 步地 ヲ西 西亞の加比丹官名

是ハ紅毛 テモ へオシポイチ チ 考ふおまじ

オホツカとチ地へ連渡られ夫らとイルカ

ウツカとチ地へ甲午滞留仕る時わ

冬にわあ冬の間卯仕るは

一 狐皮 と 西地をみ目とるわ

一 歩行仕るを引合せの透るより年

鼻 を 吹あけ と 海 を 石乃

一 一 吹くおわ を 暖をを

忽ち解落 の 熱 を は と ち と ち

に 披 の 右の節 の 乳酪 は 丁子肉桂の末

を を 塩 を 瘡 の 敷 を ち を ち



一、心も是れ、後、原中、既、同、服、の、志、は、是、  
と、中、古、の、病、も、お、惱、ま、は、る、彼、玉、の、言、  
沙、大、か、る、病、を、活、ま、し、是、を、次、切、焼、酒、一、  
浸、し、の、水、細、く、切、り、と、を、み、痔、治、は、お、矣、  
某、の、硝、子、に、入、興、下、の、勿、痛、痔、治、お、い、候、也、  
中、古、の、物、の、も、元、一、日、に、洞、深、拾、文、書、お、  
酒、の、右、の、涉、ま、し、牛、肉、小、麦、等、を、強、固、し、給、

中、古、十、文、一、日、の、難、費、十、分、に、は、る、を、去、れ、  
中、古、の、涉、後、の、態、も、お、濟、し、し、る、は、お、自、  
中、古、の、り、え、の、借、是、の、之、地、代、年、首、等、を、  
中、古、の、り、え、の、同、高、人、の、お、あ、り、し、る、は、お、自、  
中、古、の、り、え、の、終、末、を、中、古、の、り、え、の、  
中、古、の、り、え、の、終、末、を、中、古、の、り、え、の、  
何、れ、日、中、の、物、を、は、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、  
何、れ、日、中、の、物、を、は、た、た、た、た、た、た、た、た、た、



侍りて免角仁高命改繫きいられまへ  
物心然のまゝおれは清くまゝ一歩坊ゆま  
舞中まゝおへ如帝の御前にまゝ  
まゝ一服おしめ有私を人知れぬまゝ  
世所仁右の鏡中ハキリ口まゝ  
の尾介まゝおれまゝ如帝のへま  
まゝおれまゝおれまゝ私を子まゝ  
まゝおれまゝおれまゝ

まゝ中まゝおれまゝの官人  
の左は宮女雲のまゝ一  
知まゝおれまゝおれまゝ  
まゝ友人のまゝおれまゝ  
まゝおれまゝおれまゝ  
のまゝおれまゝおれまゝ  
まゝおれまゝおれまゝ  
まゝおれまゝおれまゝ







と流るる火災をよき事とせしむるは、  
石火事とて、二階の火事成  
る階、一階、切隣家、  
文、  
信、  
内、  
と、  
火、

同

一 城楼の、  
見及、

差

一 孫の外、  
事、



同

一 城門のくま魯西亞フロンヤ中興の帝伯多祿ペトルの  
像をくまゆん及ゆん

美

一 伯多祿ペトルの像の靈屋の女を仁多祿の御室  
座より下り磁石をくまゆん大井三夫計りく  
四角に仁多祿の御室に入りくゆりくゆりくゆり

一 隅の百貫目宛の磁一挺り、吸有居よ  
磁石の磁に仁多祿の螺子旋を摘りゆり吸  
取の倉庫より取めや四方の破地より取  
又螺旋を摘りゆり件の磁石より取  
くまゆん

同

一 ムスクワハ大石火をくまゆん及ゆん



善

一 流口へ入仰向より流るるの流路の場所を  
か〜流るる所の長サハ三回計におおんえ所の  
田圃の大雑な形を流路の長さを〜流るる大  
地へ捨入する所の周りを堀石垣を〜  
その内へおんえ所の流るる形を〜大  
か〜流るる流るる流るる〜

日本の国費める目を一貫目と仕るゝのである  
貫目者〜世の心〜

同

一 流るる及〜

善

一 ヤコウツカ〜  
イルコウツカ〜  
思ふよ〜



一本  
ヘルウダニ作ル

痛むくく頭の糸のかみ長く取らせ  
物々々々々ヘルウダニ作ル

同

一タバコをけ方回極々々々々々々々々  
るくくくくくくくくくくくくく

著

一本方のか、りあふくくくくくくくく

きせいのくくくくくくくくくくくく  
水晶くくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
何れと尋ねるくくくくくくくくく  
くくく

同

一武藝の秘名右くくくく



善

一右の姉一向見及ふるは是れ純  
誓古紅を思物結ひきく是の踏やう  
習ひしむらひ侍の物と申見及ふるは  
の物と申見を申し申極度申物と  
無法無夷人の弓回極よるは申物  
純く一向切あふるは是れ純く白研

一結ひしむらひ侍の物と申見

同

一右中と申お思え人往來の姉は

一結ひしむらひ侍の物と申見

善

一是れ純くは是れ純くは是れ純く  
きくは是れ純くは是れ純くは是れ純く  
きくは是れ純くは是れ純くは是れ純く



六丁の二車せよの輿の因は又從苑より  
私邸より中と回車とて此後  
出車よりた女帝の行幸連の御の御車  
御よりた車の先より前庭二人より  
よりた名然の儀は御後より  
知人より等の儀よりた

同

一 首よりた何よりた御よりた何  
よりた

善

一 後よりた女帝よりた賜よりた何計よりた  
よりた禮よりた何よりたメンダアリよりた物よりた  
序面よりた御多派帝よりた馬の像序面よりた  
あ今の女帝エカテリ十の肖像よりた



是と如帝より賜りたるはメンダアリナ  
ル者ハ魯西亞<sup>ラシヤ</sup>中何方へ来りてと属  
の多坂ハ木竹也と新を修<sup>カ</sup>割<sup>カ</sup>印<sup>カ</sup>行<sup>カ</sup>  
る者ハ其を何方へ来りてと答へ人オ其  
コトヲ念<sup>カ</sup>半の良<sup>カ</sup>也と脚<sup>カ</sup>中<sup>カ</sup>の定<sup>カ</sup>  
と来<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>と結<sup>カ</sup>々<sup>カ</sup>半<sup>カ</sup>如<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>と答<sup>カ</sup>

母同<sup>カ</sup>答<sup>カ</sup>終<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup> 上<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>答<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>

漢民より皇命と結ハ相<sup>カ</sup>交<sup>カ</sup>度<sup>カ</sup>おもみ  
る脚<sup>カ</sup>白<sup>カ</sup>砂<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>時<sup>カ</sup>度<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>外<sup>カ</sup>套<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>  
換<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>幸<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>更<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>油<sup>カ</sup>緑<sup>カ</sup>色<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>多<sup>カ</sup>呢<sup>カ</sup>靴<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>カ  
虎<sup>カ</sup>色<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>多<sup>カ</sup>羅<sup>カ</sup>呢<sup>カ</sup>如<sup>カ</sup>り

同

一<sup>カ</sup>方<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>半<sup>カ</sup>魯<sup>カ</sup>西<sup>カ</sup>亞<sup>カ</sup>へ<sup>カ</sup>救<sup>カ</sup>命<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>慈<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>  
如<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>厚<sup>カ</sup>情<sup>カ</sup>概<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>海<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>〜<sup>カ</sup>〜<sup>カ</sup>〜<sup>カ</sup>〜<sup>カ</sup>〜<sup>カ</sup>







同

一 支那は昔より海路を以て

著

一 支那は昔より海路を以て

のつとまをたしめしむるを以て

通商はたしむるを以てしむるを以て

かり事なむるを以てしむるを以て

と支那の用をおむるを以てしむるを以て

同

一 支那の海路は昔より海路を以て

著

著

一 支那は昔より海路を以て

のつとまをたしめしむるを以て







ま水と澄せしむるお見えぬ水七数  
名と跡の節より水一ありと澄す水  
水中へ之を浸せしめし名と跡の節より水  
水の節より

同

一宗門に入らずに其の節より水一ありと澄す水  
事にはあり

一前よりその節より水一ありと澄す水  
その節の節より水一ありと澄す水  
その節の節より水一ありと澄す水  
その節の節より水一ありと澄す水  
その節の節より水一ありと澄す水

同

一十文字よりその節より水一ありと澄す水



是の切支丹  
のは是なり

著

一是の家を以て人の首に懸るるを  
はキリストと云ふ也一十又其の  
を其の末廣なるに横本と云ふは其の  
のたのむる人の定一其の定は其の  
先佛壇と稱し一其の定は其の  
後撰は

はるかに其の定は其の定は其の  
はるかに其の定は其の定は其の  
事には其の定は其の定は其の  
一フと云ふは其の定は其の定は其の  
其の定は其の定は其の定は其の

同

一其の定は其の定は其の定は其の



著

一私へ左ルボルへおの事申候中、御世様へ  
仁兵衛キリ口と申は、名は破子御と申は  
百破毫の能事、因ん物仁石と物  
仁山崎と申麦粉の如事、能事申す  
行、文物仁是、い、事、能事、申す  
板破子と申は、先治利の、事、申す

ふき、又、より、筒、の、吹、立、山、崎、の、事、申す  
筋、の、洞、窟、の、入、合、事、右、の、筋、より、二、ツ、に  
破、事、申す、破、事、申す、右、を、事、申す  
事、申す、事、申す、事、申す、事、申す  
事、申す、事、申す、事、申す、事、申す

同

註以智切

千ヤシ  
一 諸の製法見及事



一 時を足物付地と堀りて瘻をいけ厚  
板をて書と仕多く定を明そとて  
りけり物の類也て指多ふあを後  
く火とをすの火とて何からなる  
茶の度人の蒸候に仕る所の瘻  
自然に溜りて満つ斗知るむよ  
二 糸に溜りて満つ斗知るむよ

同

一 哆囉呢の織方

著

一 是を糸物仕の綿羊の毛を紡ぎて  
糸を織りて織るを織るを織る  
糸の硬き刷毛



同

一魯西亞の多量の石の路の石の卵日能く

いふ女の笑の

言

一この能く能くいふ笑のいふいふ

八九月の月の中の子の外に

星の空のいふいふいふいふ

徳のいふいふいふいふいふ

いふいふ

同

一何れ権別の子の事いふいふ

いふいふ

言

一たまたま思ふいふいふいふ







同

一ムスクワよちかゝる石橋ありてありて見

ありてありて

善

一その橋の換はるる高野の坂とて坂橋成

りて往來結

同

一彼方より日本の方へ海路あり

善

一何事によらば能はるる日本の方

より往來の記しは書物並に日本の方

より及日本の方より桂川南園路中川

渡居路より此方の水名をば何事にも取

在りて日本の方の事を書き書物此中より



書載せしむる地ノ取及ル

中川淳房の系列の  
侍所なり候に病死

と信邦とこの官医の  
やうなる居り候なり

同

一水車風車の見及ル

善

一水車ありてありて鍛冶屋御所あり

水車御所の風車の御根口取とて此の

大遠からそのとては是は流川とて

とてお用り候風車とておあり候

り

同

一城の入口は被圍の控石に彫刻あり

見及ル

善







をとも思ふよふ小東人のよきしにたまふ

一冬中の櫛ツリに冬氷のふ積如に牽せりぬ

一人よが足先をよみ結の糸を結ぶのよ

うらたの貴人のつるまじくしせしむ

一へ左ルボルに籠りよの野イノシ猿 鬼雀はけしぬ

矮チマホ鶏うなむ時粒のゆきの良持ゆすし

海しふ定ましく烟をよぬ彼玉の者しむ

取珍保ちしり問及の修中ゆはゆきよぬ

とぞんし〜烟をよぬ物しむとぞんぬ

一當今の如事し〜御名をいエガテリナ。

アレキセウナとしし少年の六十にち子の

御名ハパウルベトロイナとしし少年

二十九皇孫は一人をアレキサンデル。パウ

ロイナとしし少年十六一人をコンスタ







